

『Speaking Gym Primary』の発刊にあたり

津久井 貴之
工藤 洋路

I. 小中高連携した英語教育の実現に向けて

1. Speaking Gym のスターター『Primary』

「発表」及び「やり取り」の2領域の言語活動や「聞く・読むこと」の領域との領域統合型言語活動の充実、小中高を通した系統的な英語教育の実現に欠かせません。基礎的な技能の育成を目指した『Primary』の発刊により、既刊の『Basic』、『Standard』と3段階で表現領域の技能を長期的・継続的に伸ばさせていくことが可能になります。

2. 『Speaking Gym Primary』の特長

本書の特長は、以下の3点になります。

- ① 活動前に model 文を提示し、そこで、ポイントになる表現の練習を行うとともに、model と同じように進めれば、言語活動が行えるようにしている。
- ② model で使用される会話の継続のさせ方・つながり方や発表の仕方などの支援やヒントが生徒用のシート中に明示されている。
- ③ model を基に生徒同士で活動が行えるように活動のレベルや内容を基礎的なものに制限している。

なお、既刊の2書籍と同様に、「話すこと」の2領域について10分程度の帯活動に楽しく取り組みながら技能を伸ばしていただけるように、さまざまな言語活動を用意しています。さらに、「主体的に学習に取り組む態度」を育成するため Self Check 欄では、活動の振り返りだけでなく、家庭学習でうまく言えなかった表現などをライティングで復習する機会を提供しています。

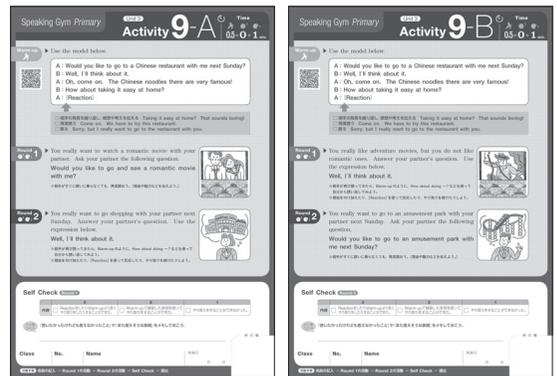
II. 各領域の特徴や活動例(話すこと [やり取り])

1. 「やり取り」の重要性

学習指導要領解説にも示されているように、「教師主導の生徒との英語によるやり取り」は、各言語活動の事前・事後の活動として行われる大切な「支援」の1つです。全 Activity に用意された model

文を使い、教師が「やり取り」を生徒と行えば、生徒同士の「やり取り」のモデルとなるとともに、活動の事前の支援となるでしょう。さまざまな「会話を継続・発展させる方法」(communication strategies)を用いながら、英語の授業中の教師と生徒の「やり取り」も充実させていくことが大切です。

2. 「やり取り」の活動例 (Unit 3 Activity 9)



ここでは、相手の誘いを控えめに断りつつ、新たな提案をするという流れや言語の動きを短いシンプルな「やり取り」の model 中で学びます。

A: Would you like to go to a Chinese restaurant with me next Sunday?

B: Well, I'll think about it.

A: Oh, come on.

The Chinese noodles there are very famous!

B: How about taking it easy at home?

A: [Reaction].

実際の Activity では、最初の A の質問は変えながらも、Well, I'll think about it. や How about ~? を用いて model と同じ言語の動きについて習熟を深めるとともに、 部分や [Reaction] は生徒が自由に発想して「やり取り」を成立させます。

津久井 貴之(大妻中学高等学校 教諭)

Ⅲ. 各領域の特徴や活動例(話すこと [発表])

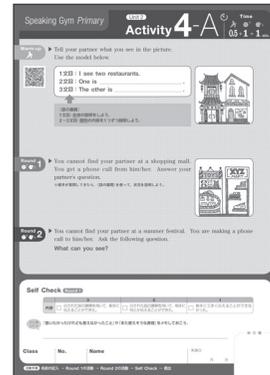
1. 「発表」の指導に向けて

「発表」と聞くと、原稿を書いて、それを覚えて、スピーチをするという活動(prepared speech)が思い浮かぶかもしれませんが、学習指導要領でも「話すこと [発表]」の領域について、「即興で話す」と記載があるとおり、必ずしも準備した英語を話す活動だけに限定されるわけではありません。例えば、友人から「昨日の映画はどんな内容だった？」と尋ねられた場合、ある程度の長さの内容をその場で話す必要があります。相手の質問があることから一見「やり取り」と思われるかもしれませんが、まとまった内容をとりあえずは(一方的に)話すという意味では「発表」と捉えてよいでしょう。つまり、「発表」では、話すきっかけを相手が与えてくれることはあるにせよ、その後は、自分でまとまった内容の英文を作り上げて、それを相手に伝えるというトレーニングが必要になります。

3文程度でもまとまりのある内容の英語を話すためには、どのように内容を展開させるか、言い換えると、どのようにディスコースを構築するかに関するトレーニングが必要になります。中学校や高校で学ぶ典型的なディスコース・パターンの1つに、「意見(考え)→理由」というものがありますが、理由の部分を「経験→経験から得た教訓」といったようにさらに細かく説明できると、まとまりの度合いが高まります。「発表」はUnit 2とUnit 4で扱われていますが、「意見→理由」以外に、例えば、「全体→個別」や「時間の流れ(First → And then → After that)」といったパターンを、各アクティビティの中で学習することで、まとまりのある内容を話せるように学習していきます。

2. 「発表」の活動例(Unit 2 Activity 4)

このアクティビティ(Round 1とRound 2)では、友だちと出先ではぐれてしまって、どこにいるかを電話で話すというシチュエーションを設定しています。話すきっかけとして、相手がWhat can you see?と尋ねてくるので、それに答えるという活動になっています。ここでは「店が2つ見える。1つは○○。もう1つは◇◇。」といった説明をする場面を設定していますので、ディスコース・パターンは、「全体→個別」を想定したものになっています。



まずはWarm-upとして、このディスコース・パターン(以下のもの)を学習します。

1文目：I see two restaurants.

2文目：One is a Chinese restaurant.

3文目：The other is an Italian restaurant.

これにより、まずは全体的なことを述べたあとで、oneとthe otherという表現を使って個別の事柄が説明できることを学ぶことができます。

Round 1とRound 2では、実際の場面のシミュレーションとして、相手は自分がどこにいるか知らない設定(information gapがある)です。Warm-upで学習したディスコース・パターンを使うことで次のような説明ができます(Round 1の想定発話)。

I see two stands. One is a popcorn stand. The other is an ice cream stand.

相手により分かりやすい説明をするためには、この3文に加え、その店の特徴を説明するとよいでしょう。ポップコーン屋さんなら、Four people are waiting in a line to get popcorn.などを加えるということです。このような発展的な説明の方法は、解答編のCommunicate Moreで示されており、Warm-upの内容よりも多くのことを話せる生徒にとって参考になると考えられます。

このように「発表」の各アクティビティでは、基本のディスコース・パターンとさらに応用的な展開方法を学習できます。即興で複数の文を話すことは簡単ではありませんが、「発表」のアクティビティを通して、その力を身につけることが期待できます。

工藤 洋路(玉川大学 教授)

参考文献

文部科学省(2019)。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 英語編」